

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 9 日現在

機関番号：32668

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530610

研究課題名（和文） 共感疲労の観点に基づく被虐待児支援プログラムの構築

研究課題名（英文） The Construction of Programs for Abused Children on the Standpoint of Compassion Fatigue

研究代表者

藤岡 孝志（FUJIOKA TAKASHI）

日本社会事業大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：30199301

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、共感疲労の観点に基づく被虐待児への支援プログラムの構築であった。共感疲労に関する最適化水準モデル及び、共感疲労と職員の援助者としての機能（ファンクショニング）（被虐待児との関わりで重要となる愛着養育行動及びFR行動）との関係性の検討を踏まえたプログラムを作成した。今後の課題は、①共感疲労の3タイプの特徴の解明、②援助者としての機能の解明、③援助者支援項目の精緻化、④援助者支援学の構築の必要性、である。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to examine the programs on the standpoint of Compassion Fatigue Model. I examined the relationship between Compassion Fatigue and Functioning (Professionalization of care givers and social workers) used FR behaviors questionnaires and Caregiving Behaviors on the stand points of Attachment theory. Four tasks based on these were shown last. 1, Researches to make clear the characteristics of three types of Compassion Fatigue. 2. Necessity of construction of Functioning as a care giver. 3. Examination and working-out on support items for care givers or social workers, 4. Necessity of construction of study to think about support to a care giver or a social worker.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,050,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：児童福祉

1. 研究開始当初の背景

バーンアウト研究に代表されるように、アメリカ等の西欧諸国では、ここ30年の間に援助者支援プログラムが科学的にも実践的にも急速に発展してきている。特に最近10年では、STS 概念とならんで、共感疲労の研究や実践活動 (Figley ら、1995, 2005) が、援助者支援プログラムの開発・発展と密接に関係している。これは、ひとえに、専門職としての質を確保することこそが、利用児・者への対処の質を保障する上で重要な位置を占めるとの共通認識からである。

これまでの基礎研究によるデータ分析の結果、共感満足については、「仕事仲間との関係における満足」、「利用児（者）との関係の中での満足」、「援助者の資質としての満足」、「人生における満足」の4因子が抽出された。共感疲労に関しては、「代理性トラウマとして蓄積される共感疲労」、「否認感情」、「PTSD 様の共感疲労」、「援助者自身のトラウマ体験」の4因子が抽出された。これらから、共感疲労には、(もともとあるトラウマが再燃した)「トラウマ優位の共感疲労」と(新たなトラウマになる可能性を持つ)「ストレス優位の共感疲労」の大きく二つがあることが示唆された(藤岡, 2008 他)。子どもとの関係性がこじれてきた場合に、これらの中の、特に利用児との満足感が低減し、さらに、共感疲労も、代理性トラウマを中心に増大することが予想される。このように、共感疲労や共感満足のさらなる細かな検討が、被虐待児への支援プログラムとして有効に機能することが考えられる。これまで、施設内の被虐待児への対処は、個別的な心理療法や生活場面での職員による関わりなどが中心であったが、援助者自身がいかに虐待を受けた子どもにとっての安全基地たりえているのかと

いう日々の生活の中での職員自身のありようこそ、信頼感や安定感を基礎におく愛着関係が形成される重要な要因になると考えられる。しかし、これらの点を考える際に、職員への支援という観点は十分ではなかった。これまでは、援助者支援と被虐待児への支援が切り離されてきたとも言える。これらを統合することこそ、施設内での被虐待児支援に一石を投じることになると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、虐待を受けた子どもたち**に対する支援を考える際に、直接子どもに関わる職員の共感疲労や共感満足を手がかりにすることができるかどうか**を検証することである。それは、1990年代以降アメリカを中心として、理論的にも実践的にも急速に発展してきた援助者支援、特に「二次的トラウマティック・ストレス (以下、STS)」及びそれに関連する「共感疲労」・「共感満足」の理論と方法論を用いて、被虐待児が多数入所している児童養護施設に対する援助者支援プログラム及びそれを含んだ被虐待児支援プログラムを、科学的根拠に基づく効果的な援助プログラムモデルとして構築することを意味している。トラウマ体験にさらされた子どもたちに関わることで、援助者自身がSTS を受けること、そしてその状態は、援助者が共感的な関わりという専門性を行使しているときほど被りやすいことがわかってきている (Figley ら、1995)。さらに、共感疲労が高くても、子どもたちとの関わりから得られる満足感 (共感満足) が高い場合は、バーンアウトへと至ることが予防できることも示唆されてきている。

被虐待児との関わりの中で、施設職員は日々疲弊しているが、これは、共感的関与等の援助者としての専門性を行使しているが

故である。その意味で、どの子どもと関わっているときに最も疲労感を覚えるのかということは、その子どもへの援助・支援をとらえなおすきっかけとなる。安定した構造を提供することが被虐待児への対処で重要であり、一貫した養育者としての職員が子どもへと安定した状態で関わることを通して初めて実現することである。しかし、「**被虐待児への対処は、援助者支援あってこそ成り立つ**」ということは、いまだ十分に検証されていない。本研究は、共感疲労及び愛着形成プログラムに関する研究実績を踏まえ、さらに、より効果的で包括的な被虐待児援助支援プログラムを構築することを目的とする。その際に、筆者らが標準化を試みている共感疲労・共感満足の自己チェックリスト (Figley ら、1995, 2005 ; 藤岡、2006 他) を適用し、新たに子どもとの関係評価尺度等も作成し、それらとの関連性も見ていく。援助者の課題が浮き彫りになることで、さらなる個別的な被虐待児援助プログラムも特定されてくると考えられる。

3. 研究の方法

本研究は、調査研究、プログラム介入研究、及び、面接調査によって行われた。

(1) 被虐待児への支援プログラムの作成及び実施

・児童福祉施設領域の援助者や援助者支援実践プログラムに関わる関係者の協力を得て、共感疲労・共感満足評価のなかの項目を検討し、特定の項目が高く（あるいは低く）なっている援助者に対して、実際に子どもとの対応のどの部分で困難さを感じているかの面接調査を行い、プログラムの作成を行った。その上で、より効果的な援助者支援プログラム及び被虐待児支援プログラムに発展させることを検討した。

被虐待児への支援プログラムには、すでに開発されてきている愛着形成プログラムを適用するが、援助者の共感疲労のありようによって、どこが十分に適用されないのかということを検討する。その上で、援助者支援プログラムと被虐待児支援プログラムを統合させた包括的な支援プログラムを開発していく。

(2) 共感疲労と援助者の支援行動の件形成の検討

本研究のプログラムの妥当性を検討するため、共感疲労と援助者の支援行動の関係性を質問紙調査を通して行った。

(3) 支援プログラムの効果の検討—面接調査—

効果的な援助者支援及び被虐待児支援プログラムのモデル構築及び、改善点を発見できるような方法を検証し、その検討結果を実際の施設職員を交えて検討した。その結果、この援助者支援・被虐待児支援の実施指針となるガイドラインと、効果的なモデル構築、改善点の発見的アプローチのための諸様式をまとめたリストを作成し、広く汎用化できるものとした。

4. 研究成果

(1) 援助者支援・被虐待児支援プログラムの調査の実施

プログラム実施可能な児童養護施設を選定し、援助者支援・被虐待児支援プログラムモデルに基づく個別プログラムを実施し、効果の評価とプロセスの時系列分析及び評価を行った。その際、プログラム評価のためのプロセス評価尺度（特に研修における評価尺度）及びアウトカム評価尺度、子どもの主観的QOLも作成し、プログラム実施の方法論的なモデル構築も目指した。

さらに、本研究の大きなテーマである援助

者の共感疲労の程度が、養育行動にどのように影響するかということをも量的な質問紙調査によって検討した、その結果、共感疲労が高くなるにつれて、不適切な養育行動であるFR行動が昂進することが統計的に実証された。「援助者支援・被虐待児支援プログラム」というように、「子どもへの支援は、養育者への支援である」ことが質問紙調査という限定された手法ではあるが、実証されたいえる。以上は、Fujioka(2011)において発表した(*Journal of Social Policy and Social Work Vol. 15. 39-57 2011.*)。

(2) 効果的な援助者支援・被虐待児支援プログラム(完成版)の構築

援助者支援・被虐待児支援プログラムの評価調査の効果評価、プロセスの時系列分析・評価の関係を分析し、効果への寄与という観点からプログラム要素を見直し、プログラム(完成版)を作成した。提案モデルに対して、共感疲労・共感満足・バーンアウト理論及び愛着形成の観点から再検討を行った。また、援助者支援で重要な自己チェックリストについて、さらに検討し、共感疲労については4因子、共感満足についても4因子を特定し、援助者支援の観点から、援助者を多面的に評価し、支援の方略が組めるようにした。この尺度は、現在被災地における援助者支援にも活用されており、児童領域に限らず、広く汎用化されていくことが期待される。以上は、藤岡(2010)において発表した(*日本社会事業大学研究紀要 第57集*)。また、具体的な支援プログラム(共感疲労の観点に基づく被虐待児支援プログラム)については、以下の成果物に記載した(藤岡孝志 2011 『子ども虐待への新アプローチ「愛着臨床」』社会保険研究所 全66ページ)。

(3) 共感疲労の観点に基づく被虐待児支援プログラムの構築—共感疲労の最適化水

準モデル—

プログラム実施可能な児童養護施設を選定し、共感疲労の観点に基づく被虐待児及び援助者支援プログラムの個別プログラムを実施し、効果の評価とプロセスの時系列分析、及び評価を行った。その際、プログラム評価のためのプロセス評価尺度(特に研修における評価尺度)及びアウトカム評価尺度、子どもの主観的QOLも作成し、プログラム実施の方法論的なモデル構築も目指した。

さらに、本研究の大きなテーマである援助者の共感疲労の程度が、養育行動にどのように影響するかということをも量的な質問紙調査によって検討した。その結果、1) 大きく「共感疲労低群」(A型共感疲労)、「共感疲労中間群」(B型共感疲労)、「共感疲労高群」(C型共感疲労)の3つに分かれることが検証された。また、2) 援助者としての資質としての満足を除いて、共感疲労高低群で、仲間、利用児、人生3つの因子において、有意差がみられた。また、3) 共感疲労が高くなるにつれて、有意にバーンアウト数値が高くなっていった。このことから、共感疲労尺度が、バーンアウトを予測しうることが示唆された。4) 援助者としてのファンクショニング(援助の質)との関係性をFR行動尺度及び愛着養育行動評定尺度を用いて検証した。その結果、FR行動の4つの因子すべてにおいて共感疲労が高くなることでFR行動も高くなることが示唆された。一方で、愛着養育行動は共感疲労によって有意な差がなかった。共感疲労の調整が養育の質に左右することが示唆された。さらに、5) 個別支援の必要性を検討し、共感疲労の最適化モデルの実践例として、個別支援のためのコメントフォーマットを作成した。「援助者支援・被虐待児支援プログラム」が、「子どもへの支援は、養育者への支援である」ということを実践する

アプローチとして位置付けることができる可能性が考察された。以上は、藤岡(2011)において発表した(日本社会事業大学研究紀要第58集)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

藤岡孝志 2011 「共感疲労の最適化水準モデル」とファンクショニング概念の構築に関する研究 日本社会事業大学研究紀要、査読無、第58集 171-220 .

Fujioka, Takashi 2011 Multiple Regression Analysis of Compassion Fatigue/Satisfaction Questionnaires, and Correlation between these Questionnaires and Care Providers' Behavior (FR behavior) in Japanese Child Welfare Facilities. *Journal of Social Policy and Social Work*, 査読無, Vol. 15. 39-57.

藤岡孝志 2010 共感疲労の観点に基づく援助者支援プログラムの構築に関する研究 日本社会事業大学研究紀要、査読無、第57集 201-237

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

藤岡孝志 2011 『子ども虐待への新アプローチ「愛着臨床」』社会保険研究所 全66ページ

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤岡 孝志 (FUJIOKA TAKASHI)

日本社会事業大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：30199301

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

